寄稿

数々の思い出

斉藤　裕（新6回生）

学制改革で、新制中学が出来、選抜試験を受けて岩手中学校に入学したのは昭和二三年である。当時はまだ終戦後の世情激変期で日本そのものが復興へと必死の時代だった。

入学時何と言っても、学科の中で初めて接する「英語」が興味津々だった。しかし最初に教わったのは、挨拶でもアルファベットでもなく、あの無味乾燥な「発音記号」だったのである。先生はテラさんこと高橋与平先生と記憶している。一月ほどでリーダーのJACK&BETTYに入った時にやっとこれで英語だ、と嬉しかった。今の教育とだいぶ違っていたようだ。岩中、岩高は当時としては革新的な六年一貫教育指針で、中学校の中に高

校のカリキュラムまで進むという方針のお陰で大学受験に際しては随分と余裕があった記憶がある。

運動部の思い出

最初、何のクラブに入ろうかと思っていたが、桜城小学校の時に、雫石川で泳いでいたらクロールの泳ぎ方が大変良いと褒められたことがあったので躊躇せずに水泳部と決めた。四月にいきなり「高松の池」に連れられていき、泳がされる！　勿論赤フン（赤い六尺フンドシ）。一〇分も泳げば骨の髄まで凍え、唇は紫！　焚き火にあたってまた飛び込む。順調にいっていたのであったが、ある昼休み、校庭の鉄棒から飛んでいたら、こけて左手を骨折してしまった。

瀬川骨接ぎで、脂汗を流しながら、整復してもらった。治癒したときにこれではならじと、体操部に転部した。当時の体操部は岩高全盛時代で国体選手がゴロゴロいた。マット体操に始まり、鉄棒、跳馬、平行棒、つり輪など次々に教わる。ただ案に相違して同級生、先輩達も結構骨折が多かった。

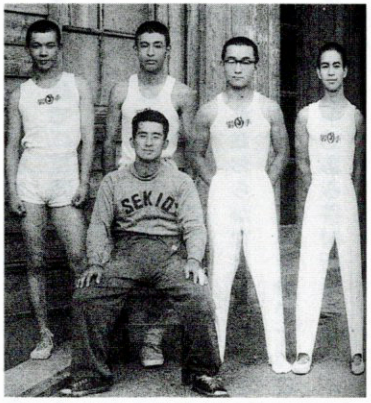
何より楽しかったのは、夏休みの合宿。校内に蚊に刺されながら泊まり、ドラム缶に火をたきながら、大きい鍋で飯とカレーライスを作ったもの。ありあわせの粗末な材料だったろうが「旨かった」と覚えている。二年、三年となってなぜか炊事係は小生が多かった。

また合宿の楽しみ？の一つに合同練習があり、女子校の諸先輩が一緒に練習するのに、胸をときめかせたものである。ニキビ華やかな、男子校の生徒には、跳びはねる鮎のような女子体操選手はまぶしい存在だった。

先輩、後輩の縦割りの線は絶対的なもので、もし服従しないと恐怖の「顔面こすり」がやってくる。これは鉄棒であたかも紙やすりのようになった胼胝（たこ）だらけの手掌で顔をこすられるもので、ちょうど砂場に転んで擦ったようになる。家族には鉄棒で落ちて砂場で擦ったと説明。

自分にとって、体操部に在籍したことはその後の人生観に一つの意義があったと思っている。右も左も分からない一三、四歳の子供にとって、個人競技の開始時間はストレスだ。

職員室風景（昭和30年）



足沢至先生と体操部員（昭和28年）

背番号を示し、ピーという笛で演技開始を促される。心臓は早鐘の様。自分に「落ち着け！万全を期せ、やるんだ！」と言い聞かせ、走り始める。この決断というか、自分を鼓舞して動かす習慣というか、それが長じて後の生きる上での心の動きになっているような気がしてならない。とくにも外科医という職業柄、瞬時の決断と行動が要請されることが多い。シチュエーションは違うが、この少年時代の体験は生き様の上で大いに役立っていると思われる。

当時は、今と違ってスキーの普及率は低かった。学校の倉庫を覗いたら何と5本くらいのカンダハー（ビンデングの一種）つきのスキーが眠っているではないか。同級生と語らって、岩手高校にスキー部を作ろうということに。予算処置とか先生方に相談し、部長には古川七郎先生をお迎えして、国体選手のコーチまでつけて、鉛温泉で合宿訓練。時の国体予選に出場したものである。

結果はともあれこのように生徒の自主性を重んじて、活動させてくれた学校の姿勢はわれわれを育ててくれた。精神的にも、肉体的にも。

先生方の思い出

●小笠原哲治先生

もちろん、著名な画家ではあるが、偉大な教育家であると思う。中学一年から三年まで担任。単に勉強の事だけでなく、「人間いかに生きるべきか」何度も何度も薫陶を受けた。

先生の好きな言葉で、いまでも覚えているのは（為せば成る、為さねば成らぬ何事も、成らぬは人の為さぬなりけり）と、山中鹿之助の（我に七難八苦を与えたまえ！）と月に祈る言葉、遊びたい盛りの怠惰な若者には格好の人生訓であった。先生は他人にはもちろん厳しい方だったがそれ以上にご自分に厳しかったのでは。

「サイトー（語尾上がる！）、お前の絵は、技巧はあるが、心がないなー」ゆっくり物静かで優しい口調ではあるが、厳しいご批判を得たものでした。

いつも前向きの厳しい態度を崩されることはなかったのですが、その底に生徒を育てる滋味をわれわれは感じ取り、先生の背中について行こうと努力しておりました。

●柏木重興先生

高校時代の担任。温厚そのもの。小さいことにこだわらない。結構太っておられました。登校時、自動車（トラック？）に骨盤部を轢かれたことがあるのですが、骨折など無く単なる脂肪挫滅だけで終わったとかの噂を聞き宜なる哉と安心したものでした。当時のC組はエリート意識ばかりある悪がきの集団でしたので、遅刻、早退は日常茶飯事、ストーブの薪は教壇の下に隠しておくわ、授業中に内職はするわで、さぞかし先生の頭は痛かったことと思います。後年同級会にご出席の折りに（お前たちの悪戯は皆知っておったが、かわいげがあったから黙認してたのよ）とのお言葉でした。

薪ストーブでアルミ弁当を暖め、おかずが焦げて微妙な匂いを教室に漂わせる、教科書を立ててその蔭で二校時ごろに弁当を食べるスリル、昼食時にはまた空腹になって売店のジャムパンを買って食べる。皆当時のなつかしい思い出で、今の学生には想像もつかないでしょう。いずれおおらかな良き時代に私たちは、良き先生に恵まれていたのです。

私の好きな歌手である谷村新司のリサイタルで、彼のトーク。「あの頃は良かった！」そのあの頃とはいつのころか？　それは学生時代なのだそうです。なぜか？——全てが新しい体験だからだそうです。確かにそう！その砂漠が水を吸い込むように全てを吸収するときに、良い先生方に巡り会えたことは本当に幸せでした。

●山中順三先生

人も知る慶応ボーイ、江戸っ子、有数の合

理主義者、博学。にやりと笑って皮肉で人をばっさり。実に緻密に配慮をくださる。

小生の医科大学進学をアドバイスくださったのは、先生です。またご媒酌の労もとっていただきました。そのときの先生のお言葉。

「離婚する心配があるなら、結婚式に一杯金をかけろ。その金がもったいないから離婚の危惧はいくぶん減る。そうでなかったら結婚式にかける費用など無駄。」

教科の英語には、我々高校生にはもったいないくらいの方でした。初めてシェークスピアを学んだのも先生からでした。

常々「俺の講義で間違いをめっけたら二〇〇点やる！」と豪語しておられました。一回だけリップバンウインクルの訳で間違い発見。二、三度のやりとりで小生が正しいことを了承していただき、次の採点を楽しみにしていたのですが一〇〇点だけでした！

思い起こせば、数々の日本でも著名な先生方が教鞭を取っておられました。

数学の千田先生、国語の小田島孤舟先生、生物の小山先生などなど枚挙にいとまがありません。

どの先生にもユニークな特徴あるニックネームが奉られておりました。そのうちの一つだけ披露。

同級生が職員室に行って、歴史の小林先生に用があり、いわく「古川先生に用事で参りました！」小林先生のニックネームは古川ロッパさん（当時有名な漫才師に挙動が似ていた）。

勿論、大叱責と爆笑が待っていたのは言うまでもない。

四六会について

新制中学四回卒、新制高校六回卒ということで、同級会を四六会と命名。六一歳の今日でも再三にわたり集まっている。当時のことで中学から盛岡一高に大挙、転校入学した者もあれば、高校で二クラスの入学もあった。いまなんの蟠りもなく皆集合。東京支部まである。ちなみに四六会は「よろうかい」寄ろうかい！と読む。今毎回吉田長作先生と足沢至先生にご出席いただいている。

この年になると、同級生より先生方の方が若く見える事もある。

去りし青春を懐かしみ、「君づけ」でばかを語り、明日への活力にしている。

「あの頃はよかった！」